

親鸞の罪惡觀に関する表現とその意義

紫 雲 龍 教

はじめに

親鸞が捉える罪惡は行為的罪惡よりもむしろ根本的なところ、存在性にまで深められた罪惡觀に根差したものである。本論では親鸞の「煩惱」を用いた表現について、特に「煩惱成就」「煩惱具足」⁽¹⁾の二語に着目し、親鸞の罪惡觀の特徴を明らかにしたい。同時に、これらの語をまったく同一視することは親鸞の罪惡觀を損なう恐れがあるとして、問題提起していきたい。

今回取り上げる「煩惱成就」「煩惱具足」であるが、この表現に着目した研究や指摘は今までもなされてきた。⁽²⁾ 私もこれらの指摘する結論に賛同するものであるが、しかし小妻氏が「煩惱成就」を究明する上で用いられた方法論には同調しがたい。したがって以降は、親鸞自身の著述を軸に考察を加えていく。

一 仏教全体での「煩惱成就」の用例

まず、「煩惱成就」「煩惱具足」が仏教全体でどのように扱われているのかを見る。大正新脩大藏経テキストデータベース検索において、網羅されているすべての経論釈の中から、「煩惱成就」という意で使われていると考えられるものをピックアップした。⁽³⁾

「煩惱成就」が用いられる書は三四本で四九箇所。内、親鸞著作関連は二三箇所である。一方、「煩惱具足」は一〇二本、九〇箇所。内、親鸞著作関連二〇箇所であった。

「煩惱成就」は書数にして三四本（内『論註』を含め真宗関係の書は九本）。さらに、他の引文として用いられたものを除いた用例はさらに限られ、二五本である。その中、親鸞の著作が五本を占めている。

以上により「煩惱具足」の方が「煩惱成就」より一般的な表現であることが確認できた。加えて、親鸞は「煩惱成就」

を多用していることも注意すべきである。

二 「煩惱成就」の置換

親鸞以後、これらの語がどのように用いられてきたかを見ると、そのほとんどが「煩惱成就」を「煩惱具足」と同意のものであると捉えられていることがわかる。厳密に言えば、「煩惱成就」は「煩惱具足」に置換されている。

明確に「煩惱成就」を「煩惱具足」へ置換しているのが確認できるのは等心院興隆の『顕浄土真実教行証文類徴決』⁽⁴⁾であるが、明言せずに置換を行うものもいくつか確認でき、以降この置換は現代に至ってもなされている。

以降は、親鸞の用例を見て、これらがまったく同一視されるべきではないことを言及したい。

三 親鸞の使用用例

① 出扱

親鸞において「煩惱成就」は曇鸞の『論註』、「煩惱具足」は善導の『観経疏』にその基を置く。ただ「煩惱具足」に関しては『涅槃経』の引文にも使用が認められる。

- 有凡夫人煩惱成就亦得生彼浄土 (大正四〇・八三六下)
 二者深心即是真实信心自知自身是具足煩惱凡夫善根薄少。流転三界不出火宅 (大正四七・四三八下)

親鸞の罪惡観に関する表現とその意義 (紫 雲)

阿闍世者即是具足煩惱等者

(大正二一・四八〇下)

② 明確な用法の差

親鸞は先に示した出扱に基づき、曇鸞の関係箇所では「煩惱成就」、善導に準拠する箇所では「煩惱具足」を用いる。この特徴は『入出二門偈』や『高僧和讃』に見ることができ

る。例外として一点、『高僧和讃』曇鸞讚(二二)において「具縛」という語の左訓に「具縛といふは煩惱具足凡夫といふなり」とあり、曇鸞関係箇所において唯一「煩惱具足」の語が使われている。この点については和語聖教との関連を示すため後に言及する。

③ 「煩惱成就」による表現の特徴

「煩惱成就」は『顕浄土真実教行証文類』⁽⁵⁾(以後『教行信証』と略称)、『浄土文類聚鈔』⁽⁶⁾などの漢語聖教に見られる。ここでは「煩惱成就」が漢語聖教の自釈にも用いられている点に注目したい。「煩惱具足」も『教行信証』に見られるが、いずれも引文中である。さらにその引文は『礼讚』深信釈のものであり、既に善導自身の『観経疏』散善義の深心釈において、「罪惡生死凡夫」と表現が変化している。⁽⁷⁾

また、本論では詳細な比較考察は控えるが、『教行信証』「正信念仏偈」の「惑染凡夫」⁽⁸⁾と『浄土文類聚鈔』「念仏正信偈」の「煩惱成就凡夫人」⁽⁹⁾の差にも注目したい。広前略後・略前

広後いずれの立場で考えたとしても、この表現の変更は決して「煩惱成就」が不適切だったわけではないと考えられる。それは「証卷」自釈に「煩惱成就」が用いられていることからも明らかである。

最後に、煩雜になるのですべての箇所を挙げはしないが、親鸞が「煩惱成就」を使用する箇所を見ると「煩惱成就」のみで凡夫の相が表現されていることが確認できる。次に見ていく「煩惱具足」では単体で表現されることが稀であり、その点でも「煩惱成就」との表現の差がみられる。

④「煩惱具足」における表現の特徴

「煩惱具足」の表現は和語聖教に多く用いられている。仏教全体でも用例の少ない「煩惱成就」に代わって「煩惱具足」を用いたと考えられる。しかし、拙論の主張は「煩惱具足」が使用されている和語聖教は教化のために内容の程度を落としていると述べるものではない。親鸞が「煩惱具足」を用いる際にとる表現を見ることでそれは明らかになる。

凡夫はもとより煩惱具足したるゆゑに、わるきものとおもふべし。

『末灯鈔』第二通の「煩惱具足」では「もとより」という語を挿むことよって、「本来」「本質的に」、煩惱にまみれた存在であるという表現になっている。これは「煩惱具足」を使いながらも、「煩惱成就」にかなう表現だといえるのではないか。

煩惱具足の身なればとて、こころにまかせて、身にもすまじきことをもゆるし、口にもいふまじきことをもゆるし、こころにもおもふまじきことをもゆるして、…略…

はじめて仏のちかひをききはじむるひとびとの、わが身のわろく、こころのわろきをおもひりて、この身のやうにてはなんぞ往生せんずるといふひとこそ、煩惱具足したる身なれば、わがこころの善悪をば沙汰せず、迎へたまふぞとは申し候へ。

『末灯鈔』二十通における「煩惱具足」は二種類に分けられる。前者は造悪無碍を主張するものが自身を指して「煩惱具足」ととらえることを示す。その時はただ「煩惱具足の身なれば」と表現されている。後者は、阿弥陀仏の誓願を聞き、自己の在り方を知ったものが主体となっている文脈であり、そちらでは身も心も煩惱におかされているものと注記されている。

こころのうちに煩惱を具せるゆゑに虚なり、仮なり。

煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。具縛はよろづの煩惱にしばられたるわれらなり。煩は身をわづらはす、悩はこころをなやますといふ。

『唯信鈔文意』において、問題にされている煩惱が自身の外にあるものではないことが明記されている。また後者は先に挙げた高僧和讃と同じく「具縛」について「煩惱具足」で説明がなされている。しかしこちらではさらに註釈が入り、そこで身も心もおかされていると言及されている。この箇所

に關しては成立年代等も含めて考察されるべきであり、今回は問題提起のみに留めておく。

例外として、「煩惱具足」を用いる上で補足がなされていない例は四箇所ある。一点は先にあげた高僧和讃の左訓。二点目は『弥陀如来名号徳』⁽¹⁴⁾の文である。こちらは欠損箇所があり、一概に煩惱具足に關して補填がないとは言い切れない。残り二点は消息に見られるが、これらについては今のところその意図は掴めていないのが現状である。

おわりに

先に挙げた文は親鸞の罪惡觀を扱う上で数多く指摘されてきた。しかし今回の試みのように、表現に焦点を当てて考察を加えたことで、新たな親鸞の罪惡觀の特徴を見ることができた。第一に「煩惱成就の凡夫」という表現は親鸞独自の罪惡觀を円に表現しえているという点。第二に「煩惱成就」を「煩惱具足」に置き換える場合、親鸞においても丁寧な注意が加えられている点である。特に後者は現代の我々が親鸞の書物を扱う上で十分注意しなければならない。

- 1 「煩惱成就」は「成就煩惱」「煩惱成就」「煩惱を(ヲ)成就」を含めた語群を示す。「煩惱具足」は「具足煩惱」「煩惱具足」「煩惱ヲ具」を含めた語群を指す。

親鸞の罪惡觀に關する表現とその意義(紫雲)

- 2 小妻道生氏「煩惱成就」『高田短期大学紀要』第三号。
 - 3 管見にて、大正新脩大藏經の内、他の書からの引用文を除いて「煩惱成就」が使用されているのは『大智度論』『金剛般若波羅蜜經論』『金剛仙論』『阿毘達磨大毘婆沙論』『阿毘曇毘婆沙論』『阿毘曇心論經』『雜阿毘曇心論』『成唯識論』『大乘阿毘達磨雜集論』『菩提行經』『金剛般若經疏論纂要』『妙法蓮華經玄贊』『金剛般若論會釋』『無量壽經優婆提舍願生偈註』『中觀論疏』『大乘義章』『鳩摩羅什法師大義』『華嚴經内章門等雜孔目章』『摩訶止觀』『大日經住心品疏私記』『顯淨土眞實教行證文類』『淨土文類聚鈔』『入出二門偈頌』『淨土高僧和讃』『淨土三經往生文類』の二五本は確認した。
 - 4 「有凡夫人煩惱成就」は具縛の凡夫煩惱具足せるを指す。具足は成就円滿の義なり。『眞宗全書』二三卷、妻木直良編、二〇四頁。
 - 5 大正八三・六一六上。
 - 6 大正八三・六四四下及び六四五下。
 - 7 大正三七・二七一上。
 - 8 大正八三・六四五下。
 - 9 大正八三・六〇〇中。
 - 10 大正八三・七一一下。
 - 11 大正八三・七二一上。
 - 12 大正八三・七〇二上。
 - 13 大正八三・七〇七下。
 - 14 淨土眞宗聖典原典版八二三頁。
 - 15 大正八三・七二四中下・七二七下。
- 〈キーワード〉 親鸞、罪惡觀、煩惱成就、煩惱具足
(龍谷大学大学院)